

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団	
施 設 名	大分県立総合文化センター	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	28,366	(千円)
公演事業	14,868	(千円)
人材養成事業	3,724	(千円)
普及啓発事業	9,774	(千円)

(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	第3回 大アトリウム (アート&りずむ)遊園地	2019年7月13日	大分県立美術館、大分県企画振興部、大分大学、大分県立芸術文化短期大学、別府大学短期大学、ノットファクトリー、ゆりかごバレエ教室、エーエフビー、PACIFIC ENGLISH、WOODSTOCK	目標値	4,000
		iichiko アトリウムプラザ iichiko Space Be		実績値	3,000
2	大分県民ミュージカル 普及事業	2019年 8月14日～18日	野口アキラ、岡崎亮子、西川晴香、石原万吉、小野香織、穴井友香里、ほか	目標値	150
		iichiko Space Be		実績値	112
3	しあわせアート♡物語 ～おでかけクラシック コンサート～	2019年7月12日 ～12月13日	地元若手アーティスト 倉堀翔、フェリーチェ楽団、佐藤広美、アミティエ、ピアーチェ、嘉目真木子、藤澤菜那	目標値	1,000
		大分県内学校、 社会福祉施設 等		実績値	560
4	ワンコインリレー コンサート	2019年10月、11月、 2020年1月	イル・デーヴ(声楽アンサンブル)、 レナード衛藤+森下真樹 (和太鼓+コンテンポラリーダンス)、 新垣 隆(現代音楽/ピアノ)	目標値	1,600
		iichiko 音の泉ホール		実績値	2,516
5	恋愛体験ワークショップ	2019年 7月、9月、11月	福田修志、松本 恵、田中俊亮	目標値	130
		iichiko Space Be		実績値	98
6	音楽と科学レクチャー 「音をみる、音をきく、音を さわる～みんなが楽しむコ ンサート鑑賞体験～」	2019年12月1日	大澤寅雄、原利明、船場ひさお、 レナード衛藤、森下真樹	目標値	120
		iichiko 音の泉ホール		実績値	82
7	大分県芸術文化ゾーン 創造プロジェクト 推進事業	2019年 8月、10月、12月	田村朋弘、後藤秀樹、 朝来桂一、中谷政文 ほか	目標値	12,000
		iichiko 音の泉ホール iichiko Space Be		実績値	4,283
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

社会的役割(ミッション)と地域特性を踏まえて事業を組み立て、新型コロナの影響は一部あったものの、おおむね予定通りに事業を進めることができた。

<社会的役割と地域特性の把握>

大分県立総合文化センター（以下、当センター）の社会的役割（ミッション）は、芸術文化の本質的価値の追求と人材育成や社会包摂を通じた社会的・経済的価値の実現である。当センターでは、異文化受容と文化多様性に富んだ歴史的な地域特性を踏まえ、日本有数のホール機能に加え、県立美術館、国際交流プラザ、民間施設と一体整備された施設特性を活かしながら、そのミッションに取り組んでいる。また、平成 30 年度に本県で開催した国民文化祭&全国障害者芸術・文化祭を受け、主たる会場となった当センターでは、そのレガシーとして①県民総参加、②異分野コラボ、③人材育成をさらに発展させる事業立案が求められていた。

<事業の適切な組み立てと予定通りの事業推進>

このため、本年度は県民による公演 1「県民協働制作バレエ」をメインの柱に据え、①県民総参加、③人材育成を推進するとともに、普及啓発 5「恋愛体験ワークショップ」、同 6「音楽と科学レクチャー」などの②異分野コラボも積極的に実施した。そのうえでこれらの諸事業を、普及啓発⇒人材養成⇒公演といった連続したサイクルとして展開させることで、県民の鑑賞力・実演力向上のため、戦略的に取り組んだ。

3 月に予定していた成果発表会やアウトリーチなどの一部事業は、新型コロナウイルス感染症対策により中止・延期となったが、その他は予定通りに実施された。中止・延期となった事業についても、成果発表会以前の出張演奏会やワークショップは実施できており、一定の成果があったと考えている。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

以下の通り、事業の文化的、社会的、経済的意義が継続して認められる。

<文化的意義>

県民協働制作バレエは、全国的なバレエ誌等にも掲載されて非常に高い評価を受け、全国へ発信できる公演となった。上演した演目『眠れる森の美女』は、とても有名な作品でありながら、大規模な舞台装置や多くのソロダンサーの出演が必要となるため、特に地方圏では上演が難しい作品である。本件助成をいただいたことにより、国内外第一線で活躍する豪華出演者・プランナーを迎え、質の高い舞台を新たに制作することができた。また、受益者負担の軽減を実現させ、劇場の更なる顧客拡大、ひいては日本のバレエ界の発展へとつなげることができた。

<社会的意義>

世代や地域の異なる参加者同士が互いに切磋琢磨し、芸術表現を通じたコミュニケーション能力の育成、芸術的な感性の醸成を図ることができた。また、地域の劇場が中核となって、県内の演劇団体、音楽団体、バレエ教室、大学等との連携を強化することで、今後の相互交流や、音楽関係者を中心とした新たなコミュニティ空間の創出にも貢献できた。さらに、バリアフリー対応・多言語対応助成を活用し、手話通訳、要約筆記、点字チラシ、英文パンフレットなどを用意することで、通常、劇場に足を運びにくい障がいのある方々などに来ていただくことができた。この経験を活かし、今後も社会的価値の発展・継続を図っていきたい。

<経済的意義>

前述の県民協働制作バレエのほか、現代作曲家の新垣隆氏による県立美術館の現代アート展と連携したコンサート（普及啓発 4「ワンコインリレーコンサート」）など、大分でしか観ることのできない公演を実現させることで、大分市外はもとより、県外からの来場（来場者アンケートによる県外客比率：県民協働制作バレエ 6%、新垣隆コンサート 8%）もあり、経済波及効果があった。また、人材養成 1「ジュニアオーケストラ（以下、ジュニアオケ）育成事業」で、団員の研修に、県立芸術文化短期大学（以下、芸短大）の学生が参加し一緒に演奏したことで、団員が芸短大に進学するきっかけになるなど、将来の音楽産業の基盤づくりにもある程度の寄与をしたと考える。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

一部事業に新型コロナの影響はあったが、おおむね目標を達成することができた。

<公演事業>

県民の広範な舞台参加を得て、芸術性・独創性の高い自主公演事業に取り組んだ。3つの事業のうち、公演1「県民協働制作バレエ」は計画どおり実施され目標を達成した。一方、公演2「大分ブロードウェイミュージカルシアター」、公演3「ジュニアオケ演奏会」は、3月の成果発表会が新型コロナウイルス感染症対策により中止・延期となったが、年間を通じて県内各地で出張演奏会やワークショップを実施しており、県民参加の面で一定の成果があったと評価する。特にジュニアオケ演奏会は、2020年8月に振替公演を予定しており、所期の目標達成が期待される。

- **県民を主体とした協働制作公演を通じたファン層の育成：** 県民の舞台参加と鑑賞を幅広く促進。
- **創造性、芸術性に富む質の高い多様なジャンルの公演の実現：** 県民協働制作バレエは、大分県出身の首藤康之の振付・演出に加え、新国立劇場バレエ団プリンシパルの福岡雄大氏や世界的舞踊家の中村恩恵氏など、他所では実現できない豪華なゲストダンサーを迎え、鑑賞者(満足度:目標 70%⇒実績 75%)はもとより、著名舞踊評論家から高い評価を獲得。
- **県内実演者・団体の発表・表現の場の提供と、彼らの交流の活性化：** おおいた洋舞連盟をはじめ県内オーケストラなどの芸術文化団体を結びつけ、発表・表現の場の提供と交流の促進が図られた。
- **青少年の情操教育と将来のファン育成のための 25歳以下の来場の促進：** 25歳以下を対象とする割引チケットを、バレエ公演などで198名に販売した。また、小学生無料招待(45名)も実施し、将来のファン育成に寄与した。
- **舞台の理解促進による続けて通いたくなる劇場づくり：** 鑑賞の手助けとなる事前講座、演出コンセプトを説明するレクチャーイベントを開催するとともに、公演プログラムに演出家の言葉を掲載するなどの工夫も凝らした。
- **子育て世代が芸術鑑賞する機会の提供：** 無料の託児サービスを提供し、バレエ公演で5組6名、関連企画公演で1組1名の利用があった。引き続き、子育て世代が鑑賞しやすい環境の整備に努めていきたい。

以上の取り組みを通じて、次代を担う若い世代による創造性、芸術性の高い公演が実現できた。

<人材養成事業>

次代を担う人材育成と芸術文化活動の発表・鑑賞機会の確保に取り組み、以下の目標を達成した。

- **創造(想像)性豊かな人材の養成：** ジュニアオケ団員が、センター主催のヴァイオリンリサイタルやバレエを鑑賞し、演奏技術に刺激を受けるとともに、普段見ることのないバレエに接する機会となった(教養が高まったと感じた参加者の割合:目標 80%⇒実績 83%)。
- **豊かな感性や協調性、他者への思いやりを持つ人材の育成：** それぞれ異なる背景を持つ参加者がひとつの目標に向けて研鑽。さらに、こうした取り組みは他のボランティア活動(読み聞かせや美術館)にも生かされている。
- **若年層の参加拡大：** ジュニアオケでは他吹奏楽部との交流を通じて活動PRに努めているが、参加者は減少傾向で、なお一層のPR活動や新たな告知が必要。
- **参加者が他のセンター主催事業等へも参加：** 多くの参加者が他の主催事業等に参加(目標 30%⇒実績 57%)
- **公演事業の一翼を担う地域活動としてのホールレセプションの貢献：** 募集時に「公演時に気持ちよくおもてなしをしてもらい憧れたため応募した」という声がいくつもあつた。いわゆる「裏方」の仕事であるが、個々が自身の業務を深く理解し、来場者が気持ちよく鑑賞できる環境づくりに努めた結果といえる。
- **芸短大との連携による学生の育成：** 芸短大の学生がジュニアオケに参加し、一緒に演奏したことで、高校生の団員が音楽の道に進むことを考えるきっかけとなり、芸短大へ進学した。

以上の取り組みを通じて、参加者が、地域の芸術文化活動へも参加する機会が増加している(参加者が当事業以外の地域活動に参加した割合:目標 20%⇒実績 61%)。

<普及啓発事業>

県民が支え県民とともに成長する芸術文化の推進とあわせて、さまざまな分野との連携・協働による芸術文化拠点としての機能強化に取り組み、以下の目標を達成した。

- **年齢、障がいの有無、経済的状況、居住地域にかかわらず等しく文化芸術を享受できる環境づくり：** さまざまな事業で環境づくりに取り組み、障がい者(目標 3人⇒実績 12人)や大分市外からの参加者(目標 20%⇒実績 33%)はいずれも目標値を達成。
- **参加者が多様な価値観を感受し、自己肯定できる場の機会提供：** 普及啓発2「大分県民ミュージカル普及事業」で不登校の子どもを受け入れ、表現する喜びと自らの生きがいを見つけるきっかけとなった。
- **多ジャンルの関係機関と連携した子育て支援と将来のファンづくり：** 普及啓発1「大アトリうむ遊園地」実施などを通じ、連携団体数(目標 20団体⇒実績 20団体)や、子育て世帯の参加(目標 50%⇒実績 50%)は目標達成。
- **間口の広い企画を通じた若年層への芸術文化への普及啓発：** 大分県民ミュージカル普及事業や普及啓発5「恋愛体験ワークショップ」を通じて、若い世代のセンターへの来館を促進。
- **国際色豊かなワークショップや公演の実施による国際文化交流：** ラグビーワールドカップ期間にあわせた日本文化体験事業などを通じて、国際文化交流の推進が図られた(外国人参加者数:目標 5人⇒実績 34人)。

以上の取り組みに際しては、福祉・医療・教育等の他分野や近隣商店街との連携を十分に図った。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業期間、事業費はともに適切で、新型コロナの影響は一部あったものの、おおむね当初の計画通りに進んだと評価できる。

<入場者・参加者数>

入場者・参加者数というアウトプット指標の目標達成状況(実績値/目標値、目標値=100)を確認すると、12事業中8事業は、計画の約7割~1.6倍の範囲に収まっている。

達成率の低かった残る4事業のうち、公演2「大分ブロードウェイミュージカルシアター」、公演3「ジュニアオーケストラ演奏会」、普及啓発3「しあわせアート物語」(アウトリーチ)は、新型コロナの影響による3月公演の中止・延期が原因である。この結果、事業期間、事業費ともに、当初計画から大幅に縮小された。

一方、普及啓発7「大分県芸術文化ゾーン創造プロジェクト推進事業」については、ラグビーワールドカップ(以下、RWC)期間中に外国人向けに事業を実施する予定であったが、大分県のRWC推進委員会が公式ファンゾーンで同様の事業を実施することが直前に決定したことから、重複がないように大幅に縮小して実施したため、目標を達成できなかった。

入場者・参加者数の実績値の目標達成状況 (目標値=100)

事業	公演事業			人材養成事業		普及啓発事業						
	1	2	3	1	2	1	2	3	4	5	6	7
実績値/目標値	96	11	37	85	100	75	75	56	157	75	68	36

(出典)「平成31年度実施事業一覧」より作成

その他、効率化の観点から特筆すべき、当初の計画からの変更事項は以下の通りである。

<事業期間の見直し>

普及啓発4「ワンコインリレーコンサート」について、当初計画の昼のみ1公演×4回を、昼夜2公演×3回に変更することで、集客の効率化に努め、目標を上回る来場者数(約1.6倍)を達成した。

実際の集客面では、ラグビーワールドカップ2019の日本戦と開催日が重なり、集客に苦労した公演もあったが、新年1月4日に開催した公演は昼夜ともに完売するなど、年末年始の集客の可能性を大いに感じた。また、制作バレエについて、前回実施した平成27年度は、前年度から取りかかり1年半の制作期間を要したが、その当時の経験を踏まえて習熟を図り、今年度は10ヶ月という期間で仕上げることができた。

<事業費の見直し>

公演1「県民協働制作バレエ」において、芸術性・独創性を高めるという有効性・創造性見地から、当初予定していたゲストダンサーの人数を増やすとともに、依頼する役の数を増やした。このため、事業費が当初の見込みより増額したが、県民参加型で、かつ芸術性の高い公演となったことからチケットはほぼ完売し、収支面に大きな影響は生じなかった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当センターの有する広域的な人材・団体ネットワークと、わが国有数のホール機能という、ソフト、ハード両面のリソース(資源)を最大限に活用し、県民協働制作バレエに代表される芸術性・独創性の高い企画を実現して大勢の県民に参加・鑑賞をいただくとともに、演劇ワークショップのような新たな試みにも積極的に挑戦した。

【視点1】劇場・音楽堂等が地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮するための資源

(1) 劇場・音楽堂等を象徴する人物、鍵となる人物の存在

- 首藤康之氏：制作バレエの演出・振付・構成。大分県出身で、著名な現代振付家の作品に数多く主演する世界的舞踊家。近年では俳優としても活躍。
- 川瀬麻由美氏：ジュニアオケ芸術監督。桐朋学園大学卒で、梓室内管弦楽団のコンサートマスターなどの経歴を持ち、現在は大分県立芸術文化短期大学教授で音楽科長。
- 森口真司氏：県民協働制作バレエにてオーケストラを指揮。これまでオペラ指揮者として多くのオペラ作品を指揮。現在は大分県立芸術文化短期大学教授。
- 角屋里子氏：ボランティアスタッフ育成指導。オーチャードホールオープン当初より運営に関わり、レセプションマネージャーとして活躍。当センターの開館準備期より、運営、指導に携わる。

(2) 専属団体、フランチャイズ団体、提携団体

- iiichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ：小学校3年生から22歳までを対象とする本格的なホール付オーケストラとして平成21年度より活動開始。26年度より芸短大との連携を強化し、芸短大との合同演奏会や、県内公立文化施設への団員派遣など、県全体の芸術文化振興を牽引している。
- 大分県立芸術文化短期大学：平成21年3月に友好交流協定を締結。相互の事業に対し、講師の派遣など、全面的な協力関係にある。
- 大分県芸術文化振興会議：大分県内の芸術文化団体の活動支援や連携を目的とした団体。県内152の芸術文化団体が加盟しており、情報共有や県民参加型などの連携事業を展開している。
- おおいた障がい者芸術文化支援センター：令和元年11月に大分県が開所した障がい者芸術を支援するセクションで、その運営を当財団が受託。普及啓発6「音楽と科学レクチャー」など、障がい者の鑑賞支援について考察する公演を共同開催。
- おおいた洋舞連盟：クラシックバレエやモダンダンスなど、県内の舞踊団体が加盟している。今年度は公演1「県民協働制作バレエ」を共催し、全面的な協力を得た。

(3) 創造活動に関わる建物設備等

三面舞台やオーケストラピットなど、優れた舞台機構を備える大ホール「グランシアタ」(1960席)と、音響に定評がある中ホール「音の泉ホール」(710席)という日本有数のホール機能を有する。九州圏内で本格的なバレエやオペラが上演できる会館は少ないため、今後もバレエやオペラの上演には積極的に取り組んでいきたい。

【視点2】地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する事業として優れた点

(1) 公演の企画内容、作品の芸術性の独創性、新規性、先導性

県民協働制作バレエは、首藤康之氏の独創的な演出、振付、構成のもと、多くの県民参加を得て、かつてない『眠れる森の美女』を実現した。そこで発揮された「創造性」の詳細については、「妥当性」「有効性」の記載も参照されたい。今年度はその他に、これまで当センターがあまり取り組んでこなかったジャンルとして演劇ワークショップ(普及啓発6「恋愛体験ワークショップ」)を実施した。恋愛をテーマに、参加資格を「コミュニケーションや恋愛に苦手意識のある未婚の方」とすることで、これまで劇場に縁遠い方々にアプローチし、足を踏み入れてもらうきっかけとなった。「知り合う」「伝える」「ふれてみる」という3回シリーズで発展的に開催。シリーズを通して全てに参加した人が7名いたが、実際に交際に発展した例がなかったのは残念であった。

(2)文化芸術情報の整理、蓄積、提供、発信

自主制作のバレエやオペラについては、毎回記録映像を撮影し、情報を蓄積している。このほか財団広報誌において、当センター開館 20 年やジュニアオケ設立 10 年などのあゆみを節目節目で整理し、発信している。当センターと隣接する県立美術館を合わせた一帯を「芸術文化ゾーン」と称する大分県の芸術文化の中心拠点として位置付け、芸術文化団体をはじめ、教育、産業、福祉、医療など様々な分野の団体等とのネットワークを構築し、県内芸術文化活動の情報発信と賑わいあふれる空間づくりを目指している。

芸術文化ゾーンは、大分県中心部に位置する県庁所在地大分市の中心市街地にあり、JR や高速道路を用いて県内各地との交通の便に優れている。各地の県民に当センターを訪れてもらうにしても、逆に各地にアウトリーチを行うにしても、最も効率的・効果的な立地条件にある。

大分県芸術文化友の会「びび」は、当センターと県立美術館共通の会員組織である。会員向け（広報誌の制作や、公演・展覧会情報の郵送・メール）やマスメディア向け（プレスリリース）も、美術館と一緒に情報発信することで、実演芸術ファンにとどまらない広範な層へ波及を狙っている。

また、大分県公立文化施設協議会等の県内ネットワークの枠組みを活用し、「大分ホールナビ」と称する共同広報や研修事業、共催事業、調査研究等を市町村の文化施設等と連携して実施し、相乗効果を発揮している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

県立総合文化センターの指定管理者として、県から与えられた社会的役割(ミッション)を果たし、「創造県おおいた」(創造性と多様性に満ち、文化・社会・経済の活力にあふれた大分県)という県と当センターが共有するビジョンの実現に取り組んでいる。お客様の期待・ニーズは、来場者アンケートなどで把握し、今後の企画に反映させることで、地域の文化芸術の発展につなげている。

<ステークホルダーの期待>

当センターを運営する大分県芸術文化スポーツ振興財団は、施設設置者である大分県の政策「創造県おおいた」の実現を図るべく、隣接する県立美術館とともに、県民の幅広い欲求に応えられる多様な文化事業を実施することで、潤いのある県民生活の創造と健やかで個性ある地域づくりに寄与することを目的としている。

当センターが主催する事業については、県民参加型で質の高い公演として、評価を受けている。県はまた、ホール利用率 87%という目標を設定しており、その達成に向けて、幅広い層に当センターを知ってもらい、新たに利用してもらえよう営業活動にも努めている。

県以外の多様なステークホルダーからの期待については、次の「地域のニーズ」の項目で報告したい。

<地域のニーズ>

最終的なステークホルダーであるお客様からの期待・ニーズについては、主催事業の来場者にアンケートを実施するなどして、利用者意見・要望の聴取及び分析に努めている。

特に、公演1「県民協働制作バレエ」は当日満席となり、県民の関心が非常に高かった。アンケート結果や、公演に携わった県民の反応も非常に良く、「今後もこのような企画を実施してほしい」という声が非常に多かった。

大分県は、音楽・美術を専門に教育する県立芸術文化短期大学、県立芸術緑丘高校、私立大分中学・高校のほか、複数のアマチュアオーケストラ団体やバレエ教室が存在するなど、実演者の人口が多い。しかしながら、これらが一同に会する機会は少なかった。このため、今回の県民協働制作バレエは、彼らの相互交流を促進するきっかけとなった。

バレエを勉強している若い研究生や大分のオーケストラにとって大きな経験となっただけでなく、県民の当劇場施設の活用の幅、文化活動の幅の広さを示すことができた。出演者も、おのおのが在籍するバレエ研究所の枠を超え、ともに舞台を創り上げたため、今後の相互交流や、音楽関係者を中心とした新たなコミュニティ空間の創出にも貢献できた。本公演を鑑賞した県民は、芸術文化への関心を深め、豊かな心と感性を育むことができ、豊かな芸術文化地方都市の発展の大きなきっかけとなった。

また、今年度はジュニアオケが、竹田市に新たにオープンした総合文化ホール「グランツたけた」に出張し、地元の大分県立竹田高校器楽部と合同演奏会(公演 3「ジュニアオケ演奏会」)を開催したり、ミュージカル体験ワークショップ(公演 2「大分ブロードウェイミュージカルシアター」)を佐伯市や臼杵市といった県内各所で開催するなど、各市町村との充実した連携を図ることができた。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

当センター、県立美術館に加えて国際交流プラザも擁する大分県芸術文化スポーツ振興財団全体の中期経営戦略計画を策定し、毎年度フォローアップを行って理事会、評議員会での議論を経て、今後の当センターの運営方針や事業の企画立案へのフィードバックを行う。このような PDCA サイクルの確立を通じて、組織活動の持続的発展を図っている。

<経営全般>

大分県芸術文化スポーツ振興財団（以下、財団）は、当センター、県立美術館、国際交流プラザ、財団本部（経営管理、広報連携、ファンドレイジング・事業評価支援、障がい者芸術文化支援等）から構成され、組織全体の中期経営戦略計画（2019～2022年度）を平成31年3月に策定・公表している。当該計画をもとに、当センターのミッション、ビジョン、地域の特性・ニーズ、施設の強み・特色を明らかにし、事後の評価結果を財団全体でフィードバックし、その結果を令和2年度の劇場・音楽堂等機能強化推進事業に反映させている。このように、中期計画（P）をベースに、実施（D）・評価（C）・改善（A）のサイクルを着実に回していきたい。一方、近時のコロナ禍を踏まえるに、感染の拡大・収束の動向を切れ目なくウオッチし、計画の臨機応変な見直し・改善を図ることも等しく重要といえる。計画性と柔軟性の適切なバランスを取ることが、財団の活動の持続的な発展を図るうえで不可欠である。

<人材面>（令和元年度 財団職員 67名、うち企画/広報担当課 11名）

自主事業については担当課（企画普及課）全員でチームとして対応し、情報を共有するとともに、事業ごとに主担当と副担当を割り当て、知識・経験の継承に努めている。近年はセンター・県立美術館・国際交流プラザ間での相互異動や、大規模な芸術文化ゾーンイベントでは財団総出で対応するなど、横断的な取り組みも活発化しており、美術館との連携会議も定期的で開催している。また「働き方改革」に対応した労働環境の整備のため、チケット販売方法やジュニアオケ事務局の体制の改革にも取りかかっている。

事業開始から10年目を迎えたミュージカル体験ワークショップでは、過去の参加者の中からアシスタント講師を選抜し、初心者をサポートするなど、好循環が生まれている。

<財務面>（令和元年度 自主事業決算見込額 114,601千円）

財団の主な収入源は、県からの指定管理料と施設使用収益だが、その他にも民間からのファンドレイジングの多角化を試みている。財団全体としては、当センター、美術館共通の会員組織である大分県芸術文化友の会「びび」の会費収入がある。また、当センターに関しては、地場企業である三和酒類（iichiko）のネーミングライツ（命名権）も重要な収入源となっている。

今年度事業においては、公演「1県民協働制作バレエ」では、24社より企業協賛金を獲得した。引き続きジュニアオケなどの育成事業で広く協賛金を獲得するとともに、友の会法人会員の拡充を目指していきたい。

<各方面とのネットワーク>

大規模な制作舞台公演やイベントを企画することで多くの団体との連携が強化された。特に、オーケストラにおける他団体間交流の深まりは、令和2年度に「県民と創るベートーヴェン交響曲全曲演奏（ベートーヴェンチクルス）プロジェクト」を企画するきっかけとなった。この取り組みは最終的に、県民参加による創作舞台「西洋音楽発祥の地プロジェクト」の展開へとつながっていく。

<施設面>

防災訓練の実施に加え、防災研修も実施している。また、職員のみを対象としていた防災訓練に、ボランティアスタッフ等にも参加してもらうことで、より実態に則した訓練を実施している。